
神様なんかいない

冴河冴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様なんかいない

【Nコード】

N0404E

【作者名】

冴河冴

【あらすじ】

神はいるのかいないのか……おそらく誰もが一度は抱いた疑問だろう。いるとしたら何を思っ人を作ったのか、何を思っ世界を見ているのか……。中学生の頭脳の、限界に挑む(?) *改定したので、よろしかったら一度お読みになった方も、どうぞ*

プロローグ

中高一貫校の、空手部の部室。

「神様って、いると思う」

幹弘先輩がそんなことを言うとは、彼女　桜井ナナにとって意外なことだった。神よりも自分を信じて生きていそうな人にみえるのだけど。

「…この間神様なんていないって結論出したばっかなんですけど」
ナナはしばらくの沈黙の後訊いた。

「なんで先輩はそう思うんですか」

「だって現にイエス・キリストは生まれてるしさ。」

仏教の神かと思ったのに。少々驚いた顔をする。まあキリスト教の学校の生徒なんだからイエスの話が出るのもわからないでもないが。

「キリスト教ですか。……先輩がそう思うのは否定できませんけど、あれって御言葉がいちいち人間本位なんですよね。旧約聖書はイエスが生まれる前の話だから仕方ないにしも。……じゃあ、もうちょつと考えてみますよ。」

「ん。じゃあな」

*

ナナはテスト勉強をさぼってそれについて考えていた。

6日後に行われた学年末テストが、国語を除いて全教科20点ずつ点が下がったのは言うまでもない。音楽にいたってはアルトパートなのにソプラノパートを歌うという笑えない冗談みたいなことをしてしまった。

今はなにやら聖書のあら捜しをしている。キリスト教学校の生徒とは思えないほどの聖書の冒読ぶりだった。

創世記　天地の創造。旧約聖書1ページ。光とか水とか動物とか作る話。

「これって動植物の進化の過程無視してる。恐竜の化石とかはどうやって説明するんだろう。」

ナナはそんなことを言いながらページをめくる。不審者のようでもある。

次、創世記 アダム系の図。旧約聖書7ページ。

「九百年とか平然と生きてる人の話されても信じようがないんですけど」

ナナは面倒そうな顔をして聖書を閉じた。やる気が失せたようだ。

しばらく所在無さそうにした後、不意に本を読みはじめた。

遊神論

なにやら戦争の本のようだった。

しばらく読み終わったその本を眺めて、ナナはばたりとベッドに倒れこんだ。そして小さくひとりごちた。

「神様ってなんなんだろう」

携帯を充電器からとって、アドレス帳を開く。

あの先輩に、メールを送るようだ。親指を驚くべき遅さで動かし、文字を打ち込んでいく。

「神様って、どんな人だと思いますか」

ぱたん、と携帯を閉じ、ベッドの上に一緒になって転がる。携帯ストラップを指で弄びながら、返信を待つ。

余談だが、ビジネストークのメールで、返信が早い人ほど自分に自信を持っている人が多いのだそうだ。まあそれは状況によってあるていど左右されるものだが。

「You've got mail!」

ナナは起き上がったから携帯を拾い、ぱかつ、と開いた。1分で返信するなんて、先輩の指の構造が見たいとか暇人とかなんとかぶつぶついいつつメールを見た。

「全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人。運命も何もかもを決めることができる存在」

即座に、と言っても遅々とした指使いでだが、それに返信する。

「いるんですか、そんな人。というより、神様って人なんですか」

「それができるから神様なんだよ。いや、逆だね。神様だからそれができるんだよ。神様は自分に似せて人を作ったから、まあ人とは似た形の存在なんだろうね」

ナナはそれを見てちよつと顔をしかめる。それから迷うようになんども打ち直しながら返信した。

仮説

『それって、神という大きな存在に自分たちが似ていると思いたい人間のエゴなんじゃないですか』

ばたりとまたベッドに倒れこみ、うつ伏せになる。

それからまた小さくひとりごちた。ひとりごとが多い中学生のようだ。

「戦争だつて独裁政権だつて、人種差別や動物虐待だつてそうやって起きたんじゃないのかよ」そもそも動物虐待っていう呼び方が差別じゃねえのかよ」

知ってはならないものを見てしまったかのように、布団をばふつと頭からかぶる。人がきれいなものだとも思っていたかのようなそぶりだ。

「You've got mail！」

返信がきたが、携帯を手取る気配は見せない。

ナナは、しばらくそうしていた。

*

ナナはどこからか紙を持ってきて、シャープンを走らせていた。今度は驚くべき速さで。そもそも答えなんかないのかもしれないのだが、そんなことはどうでもいいらしい。

まあたしかに、紙に書き出したほうが上手く考えがまとまることもあるだろう。

まず紙の端に、『神』全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人と似た形のもの。絶対の存在。運命や偶然さえもつかさどる』と書いた。その横に、神はいると仮定する、と付け足す。

ナナは唇を噛んだ。紙の中央上のところに、人を作った理由と書く。ナナはどんどん書き出していく。

気まぐれ、気分、自分のクローン計画、実験、人がもたらす破壊を見たかった。人を滅ぼして破壊衝動を満たす。今すぐ消されるかもしれない。

そうして一人、禅問答を繰り返す。きりが無い言葉の数々。ときに、神の定義 全てを創造し、全てを凌駕し、全てを愛する人と似た形のもの。絶対の存在。運命や偶然さえもつかさどる と矛盾するものも出たので、それは上から線を引き消す。

と、そこで急に手が止まる。

「そんなわけ、ないじゃん。そんなのって、ない」

その目は、愛の対象を人に求めたという、その文章を睨むように見ていた。

願望（前書き）

相変わらず暗い…
こいつ大丈夫なのか？

願望

*

ナナは、二枚目の紙をもってきた。今度は別のことを書くようだ。タイトルは、『人のエゴ』。

『祈れば叶う』ご都合主義。人の願望』

『神に似せて作られた人間』自分たちは優れているという自惚れのすえの自己満足。』

『神という概念は人が作ったものである。自己満足の産物。』

『神とは幻想。自分勝手な願望の根拠のために作られたもの』

ナナは、脳内で推敲しながら最後の一文を書いた。

『結論』矛盾を誤魔化しきって神を信じれば、楽で幸せ。無責任で欲深い人間たちの心の中に、神という名の欲望はいる』

それを書いて、ナナは机に突っ伏した。

本人だって気付いてない振りこそしているが、おそらくはわかっているだろう。自分がそうやってひねくれた考えばかりをするから、中1に見えないとか、何考えてんのかわかんないとか、素直になれといわれることくらい。

ナナはゆっくりと寝息を立て始めた。

*

夢から醒めたナナは、汗を拭いながら机から離れた。頬についた、なにかのあとをなぞっている。首をひねって、キッチンで牛乳をコップに注いで一息で飲む。

夢の中、うなされていたことなどすっかり忘れてたかのように、クッキーを焼く準備を始めた。

薄力粉170gと強力粉70g、砂糖は目分量。それらを別々に

ふるいにかけておく。とき卵1個分とバター60g、バニラエッセンス少々。

バターと砂糖を白くなるまで練り、卵を加え、バニラエッセンスをたらす。粉類をさっくり混ぜ込み、一時間寝かす。

ナナの思考は、また「神様問題」に戻っていた。

確信

ある昼下がり。ナナはなんとなく外を歩いていた。

まだ答えを出せないでいた『神様問題』。それについて一人悶々と悩んでいた。それでなのか、何を思ったのか男友達…みーちゃんに聞いてみようとしていた。神様が、いるか否か、と。

*

学校への、30分ほどの道のりの通学路。

ナナは唐突に切り出した。

「神様つていると思う？」

急に訊かれたせいか、ちよつと迷つてみーちゃんは答えた。

「わかんない。でも……………いたらいいなって、思う。」

「へーえ？なんで？」

「…なんとなく」

みーちゃんは…ちなみにこれは苗字の宮崎の頭文字だ…そう言いながら笑った。

「適当だね」

そう言つてナナもちよつと笑った。

ナナは、前を見た。

「みーちゃん」

ナナは少し間をおいてから、続けた。

「神様がいうといまいと、それは大した問題じゃないのかもしれない。神様がいるから希望を持つ、だから頼るなんていう生き方は私の性には合わないよ。私つてそういうキャラでしょ？それに誰も

見ていなくても神様が見ているからいいことをするなんて根本的に間違ってるし、そんな風に誰かに優しくしたくないし、自分もそうされたくない。」

ナナは、そういつてみーちゃんを見た。

「そっか。なんか知らんけど、それでいいんじゃないん」

「ありがと」

どこかに残った後ろめたさは無視して、ナナは歩き続けた。

信仰心

一週間が経った。

ナナがキリスト教学校に入って聖書の存在を知ったのは小学一年生のとき……かれこれ七、八年前だ。月曜日から金曜日まで学校で賛美歌を歌って、聖書を読んで祈る。

友達に誘われて日曜日に教会に行ったこともあるけれど、それも一、二回だけで続きはしなかった。

小さい時から聖書に触れる機会ならいくらでもあったけれど、いまだにナナはイエスとか神とか、そういうものを信じてはいない。

*

自分の家でひとり、寝たきりになっていた曾祖母。

物が散乱して酷く汚く、生ゴミの臭いが鼻をついた。いつのだからわからないマヨネーズの容器が転がっていて、シンクには汚れた皿が洗われずに載っていた。

部屋の隅に埃をかぶった聖書が落ちていて、そしてそんななかにナナの曾祖母は寝ていた。ナナが行っても、曾孫であることはおろか、子供だということも、女子だということもわからなかった。

憶えていなかったんだろうし、見えちゃいなかったんだろうし、話もほとんど聞こえていなかっただろう。

しばらくして曾祖母は入院した。

もう誰かが来た、ということすらわからなくなっていた。乱れた服はそのまま、食べかすがそこらじゅうについて、焦点が定まらない目で天井を見ていた。

小4のナナにとってそんな曾祖母は気持ち悪いだけだった。

そして人が脆く、儚い物だと思い知った。汚らわしく、切なく、苦しく、悲しく、虚しく、痛ましく、気持ち悪く。そんな感情を一度に味わった。

曾祖母と会うことは…否、見ることは、ナナにとって苦痛でしかなかったし、今も思いたいことではない。自分の未来をそこに見るからか、哀れんで悲しむべきところをそうは思えない自分が嫌なのか、曾祖母を汚らしく思うからなのか、苦痛の理由は、よくわからないようだが。

その後曾祖母は死んだ。ナナは泣きもしなかった。まともな思考力があれば、神を信じ続けていたであろう曾祖母の成れ果てだった。

*

ナナの手元には友達に貰った本が置いてある。……キリスト教の教えの本だ。ナナは釈然としない面持ちでそれをみていた。結論は、自分に恥じないようにする…は、完全なる答えではないのではないのか。わだかまりの原因はそれだった。

ナナは迷っていた。結論を出すのを急ぎすぎたのかもしれない。やっつけ仕事で適当に済ませようとしていたかもしれない。

だからナナはもう一度考え直してみることにした。

劣等感

友達が貸してくれた本は、どれもまっとうなことばかりが書かれていた。

ナナが自分が持っていない、優しさと気遣いを持つ彼女という存在に困まれて、毎日、どんな時も空虚な感じになるだけだ。何も彼女に限ったことではないし、勿論彼女のせいでもない。彼女はナナを想って貸してくれた、それはわかっている。

ナナは結局それらを全部読んだ。

神を信じて成功した人たちの話と、神を信じるためにはどうすればいいかという話だった。そしてそれらはナナがいかにもひねくれているかを証明していた。

もしも賢い子だったら、なんでもかんでも真実を知ろうとはしなかっただろう。知らないほうが幸せなこともあるのだから。

まっすぐな子だったら、なんでもかんでも言葉の裏を読もうとするようなことはしなかっただろう。テレビとか、聖書とか、童話とか、それこそこの本とか……人の心からの、言葉とか

神を信じれば幸せになれるとか言うけれど、神を信じていなくても幸せな人はいる。それに幸せになりたいからという理由で何かを信じるというのは不純すぎるし、意味が無いんじゃないかと思ってしまう。

ひねくれてるからこんな考え方しかできないのも、こんな考え方は世間一般ではないということもわかってるんだけど。神を信じられないのも、人を信じられないのも、ナナ自身の性格とひねくれ加減のせいなのはわかりきったことだった。

もしも神を信じられるなら、きっとそのほうが楽なのだろう。

誰も疑わずに、決して消えない希望を持ち、絶対裏切らない友を得て、罪深くて愛してくれる存在がいて。

そんな風になれば……思うだけでもいい、そう思えば、きっと人生はもっと楽しくて、幸せなものだろう。

だから信じていたいんだ。

だから信じようと試みるんだ。

神様がいるとかいないとか、本当はどっちでもいい。こんな日々から抜け出したいだけ。今日をやり過ぎすのにどっちかって言うとその方が楽だから、神様を信じて、未来があるっていうことにしておく。

終わってるんだ。すさんでいるんだよ。

何やったって変わらないし、何知ったって意味無いんだよ。

壊れすぎた人に、救いは来ない。『普通』にはなれないんだ。罰を受けて死ぬ筈だったのに生かしてもらってんだよ。

「わかってるよ」

「わかってるよ」

……………わかってるの？

ナナは多分、わかっていない。

結論（前書き）

最終話ではありません

結論

『日々は限りなく空虚で、罪にまみれている。』
ナナは原稿用紙を持つてきて、そう書き始めた。

『このまま死んでも構わないと思うほど、生きるのは辛いものだ。罪を償うためには許されないことだけれど。この人生という罰を、受けなければならないから。』

人はきつと……否、私はきつと、そんな風に生きていくことになっ
っているんだろう。生まれたとき既に罪を犯して、日々自分の無力
さに泣いて、今日も虚しさに溺れて、明日もまた破壊して。

罪悪感と疎外感と、孤独感と違和感と、既視感と悲壮感。そんな
ものにさいなまれて。

私が生きてることに意味なんか無くて、悲しみ虚しさ e . t . c .
の十一字で表せる人生だ。誰かが人が生まれたのには理由があるつ
て言っただけ、それは違う。

私の存在に意味は無い。私の存在に理由は無い。

幼稚園児の頃からどうして死ねないのか悩んでいた私は、そもそ
も生まれるはずじゃなかったのだ。生まれる筈じゃなかったのだから、
死ねるわけも無い。誰も殺してはくれなかったのは、それが私
に対する罰だから。誰も助けてくれなかったのは、私が全てを拒ん
だから。誰も信じられないのは、それが私のしたことだから。

学校が楽しかったことなんて一度も無い。

家が平和だったことなんか一度も無い。

生きててよかったことなんか一つも無い。それだつて私に与えら
れた罰だから。わかつてる。だからもう全部、諦めるんだ。』

ナナは一気に書き上げると、その紙を一瞥し、丸めてゴミ箱に放
り込んだ。そのまま倒れこむようにベットに突っ伏した。

結論（後書き）

次回、最初に『私』と話していた先輩視点です

後日談（前書き）

最終話、先輩視点です

後日談

「眠い」

みきひろ

幹弘 ナナの先輩 は伸びをしてだらだと起きあがった。

今日は金曜日。学校に行かなくてはならない。

今日は部活があるし、顔出してから帰ろう。先々週と先週は休んだし、空手をやりたいし。なんてぶつぶつ言いながら幹弘は着替える。

「俺はいいけど……あいつ、生きてて楽しいのかな……」

そんな思いをふり払って、鞆を持って…朝食は食べないらしい…家を出た。

*

「中段の蹴り、始め！」

「一！」

構えの姿勢から腿をあげ、すばやく脚を振り切る。脚をつきながら拳を繰り出す。

「らあっ！」

「二！」

身体を風が抜けるような感覚。何かが流れ落ちるような快感。靄が消え、開ける視界

「ああ、やばい。俺、やっぱり空手好きだ！」

幹弘はそんなことをいいながら練習に励む。空手部には、不審者の卵が多いらしい。

何度も恍惚としたように、架空の相手と対峙する。

「やめーっ！…構えて。中段の回し蹴り、始め！」

構えから腰をひねり腿を上げ、そのまま脚を解き放つ。脚をつき、拳で風を切る。

「らあっ！」

と、その時。

あの声が　桜井ナナの、声が　弱々しく、張りのないものになっっている。次もその次も。

「桜井……？」

それに気付いた幹弘のつぶやきは、小さく霞むように消えた。

*

練習が終わり、部室でだべっていた。そんななか、何も言わず部屋を出て行くナナ。

練習中も、その後も、自分から幹弘に　否、誰にも　話しかけようとはしなかった。

その目は虚ろで、暗い雰囲気だった。まるで、生きていることそのものが辛いのかのような。

「何もなかったなんてことは絶対ない。あいつは何でも顔に出すぎなんだ。」

なにがあっただろう。と、首をひねるが幹弘には皆目わからない。

「なあ…どうしたんだ……なにかあったろ」

「いえ、別に。さよなら」

幹弘が呼び止める間もなく、ナナは出て行った。

なにも信じることができない。なにも肯定できない。果ては神まで自己満足の産物といった少女。

そんな桜井ナナの、成れ果てだった。

後日談（後書き）

ここまで読んでいただけて、感謝感激です！
どうもありがとうございます

えと、直した方がいいとか、つまらなかったのひとことでも、お願いします、感想・評価をしてください。糧になります。すごく喜びます。

これからも執筆を続けていきます。よかったらそちらもお読みください。…宣伝かよ（笑）

最後に、本当にどうもありがとうございました！
気に入っていただけたなら、嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0404e/>

神様なんかいない

2010年10月8日15時31分発行